

## Y子は獅子になった

「十年ひと昔というならばこの物語の発端は今からふた昔半もまえということになる。」

(壺井栄「二十四の瞳」より)

久しぶりに手にした一枚の色褪せた色紙が私をふた昔半以上前の青春時代へと導き始めた。

1962年11月初旬。大学4年の私は教員採用試験を受けるために比叡山へと向かった。京阪電鉄石坂線(石山寺・坂本間)を走っている電車は古くてマッチ箱のように小さかった。比叡連峰と琵琶湖に挟まれ、細長く鰻の寝床のように伸びている大津の街中をその小さな古い電車は悠長に走っていた。終点のS駅は田舎者の私には初めて見る神社造りの駅舎であった。駅前広場に出て余りにも見事な景色に私は暫時茫然と佇んだ。鬱蒼とした比叡の山、その山麓はなだらかな丘陵となって広がり、幾何学模様様の段々畑があった。山から視線を外すと陽光をあびてキラキラと湖面が鏡のように輝く広大な湖が視野に飛び込んできた。こんな別世界のような美しい風景の下で人々が喘ぎ苦しみながら生きていることを私は知る由もなかった。

校長室は絨毯も敷かれていなければ、飾物ひとつ無く机とパイプ椅子のみでそこで面接が行なわれた。当然校長は来春から私が勤めてくれるものとひとりで決めこんで学校の状況を種々説明してくれた。未だに自分の進路を決めかねて曖昧な態度でやって来た私にこれが自分の運命かと思わせるほど校長の話は真剣味があった。1時間ちかく殆ど校長ひとりが喋ったあとで言った。

「何か質問があればどうぞ。どんなことでも結構です。」

「私は勤めだした時、どちらを向いて仕事をすれば良いのでしょうか。」

「どういう事でしょうか、具体的におっしゃって下さい。」

「生徒の方を向いて仕事をすれば良いのか、それとも学校の方を向いて仕事をするべきなのでしょう。」

「君はどう考えますか。どの様にしようと思っていますか。」

「いつも生徒の方へ顔を向けて仕事をしようと思います。」

「結構です。君の考えどおりにして下さい。教育は教師の自主性やロマンがなければ駄目だと思います。」

当時の校長室は貧しく簡素であったが、校長は凄かった。大学生を相手に自分の教育理念を披瀝してくれた。あの時の校長のひとことがそれ以後の私の教員生活に多くの影響をあたえたのだ。

1963年4月。大津市S町へやって来た。S町は千古の昔より比叡山延暦寺の門前町として栄え歴史の古い由緒ある閑静な町である町は一区から九区までに区画されていた。私は少し離れた湖畔の農家の「離れ」に寄宿した。年老いた農婦がひとりで細々と農作業をしながら私の食事の面倒をみてくれた。

新任1年目から3年生の商業科クラスを担当した。当時は戦後の第一次ベビーブームの生徒たちが高校に入り、1クラス60名の生徒で溢れていた。出席簿を見て驚いた。同姓の生徒たちが多くいたことだ。山本・山下・山口・山田姓の生徒が20余名も居た。先生に何うと比叡の「山」の下、口、本、田から付けられたものだという。すべて六区から九区の、あのなだらかな丘陵地帯に住いする者だと言う。先生や生徒たちは彼等を姓で呼ばずA男、B夫、C子などと名前で呼んでいた。当然姓だけでは誰のことが判らないからだ。そして1年後に私に強い衝撃を与えて去ったY子もそんな仲間のひとりであった。かれらは皆明るく素直でのびのびと生きている。特にY子は成績優秀でテニス部の主将をしており優しい心根の美しい少女であった。若くて独身の教師

の利得かどうかは知らないが、彼らは毎晩のように私の「離れ」に遊びにやって来、自分たちの将来や夢について若々しい希望を語り合った。

その当時の就職試験は時期が早く5月頃から順次行なわれていた。Y子はスポーツ能力にも富んでいたがそれ以上に美術的能力に恵まれていた。Y子は自らの意思でTデパート京都支店を選んだ。ダイエー等の大型量販店の出現していない時代で、三越・大丸・Tが三大デパートとして君臨していたのだ。叡山高校から10名ほどの女生徒が志望していたが、その中でY子がすべての面で群をぬいて優秀であった。

テストが終わった6月末の夜、Y子はひとり「離れ」にやって来た。

「どうした。Y子」

「先生、駄目だと思います。」

「テストが出来なかったのか。」

「いいえ学科テストは全部出来ました。」

「それなら大丈夫だろう。」

「いいえ駄目だと思います。」

「どうして。」

「……………」



口を噤んで涙を流すY子からやっとの思いで聞きだしたのは次の様なことだ。当時新しい方法として集団面接が行われ、Y子も10名程度の受験生と集団面接をうけた。順番に学校名・氏名・現住所を言ったのち、面接官がY子に「本籍地」を尋ねた。大津市S町X番地とY子は明るくハキハキと答えたが、1時間ほどの面接でY子が口にできた言葉はそのひとことであった。誰一人としてY子に質問をしなかった。屈辱的な扱いに震えながらじっとY子は耐えたと言う。毎晩のように「離れ」にやって来るY子たちの住いは六区から九区であり、そこはまた、滋賀県最大の「未解放部落」とも呼ばれていた。

「先生、（未解放）部落を悪いと思いますか。」

「いいや、全然思わない。」

「でも違うでしょ。」

「なにが違うんだ。君は利発で賢い子だ。君の皮膚の下にも、私の皮膚の下にも同じ日本人としての熱い血が流れているだろう。どこが違うんだ。ただ君が部落と呼ばれている処に生まれたただけだろう。それがどうしたというのだ。君と私は同じ日本人、否、人間同士と違うのか。」

Y子は自分の内部に積もりつもった苦しみを吐き出すかの様に反発してきた。

「先生だからそんなふうには言ってくれますが、世間は違います。世間は私たち（未解放）部落の人間を一方向的に差別します。」

「さてY子、世間ってなんだ。世間というひとつの生きものがいて、そいつが君たち（未解放）部落の人を差別するのか。」

「……………」

「違うだろう。私が世間だ、Y子、君が世間だ、Aが、Bが、Cが一人ひとり世間なんだよ。本当は一人ひとりの人が『世間』という実体の無いものを隠れ蓑にして個人の意思で差別しているのではないのか。」

「……………」

「Y子、君もやがて数年後には結婚をするだろう。仮に君が（未解放）部落外の男性と恋に落ちたでしょう。彼の親は君にきっこう言うだろう。『貴方はいい人だと思います。でも世間が（未解放）部落の人との結婚を認めない状況では、私たちも息子と貴方の結婚を認めることはできません。』と。Y子その時君はこう言っておやり、『お母さん（お父さん）貴方が世間ですね。きっこうなんですよ。』と。」

Y子は来た時よりもずっと明るい表情で帰って行ったが、逆に私の気持ちはY子のこれから先を考えると滅入る一方であった。

数日後、予想どおりというかY子一人が不合格になった。企業は事情を説明せず、学校も企業に問い合わせなどしない状態であったが、Y子はもう涙を見せなかった。

同対法が制定されるのは、ずっと後のことゆえ、Y子たちの住む（未解放）部落は貧しく、差別の嵐は吹き荒んでいた。誇りまみれの道は細く曲がりくねっており、A男の傾きかけた家にはムシロしか敷かれていなかった。1年前私がS駅前広場から眺めた美しい段々畑も本当は平地に良い土地を与えられない人々が山の急斜面を切り拓いて作った畑で米はとれず、下から水を運びながら僅かばかりの野菜を作っているのだと判った。樹木の生い茂る山裾に住みながら叡山への「入会権」を認められない人たちは、燃料の薪として湖畔に打ち上げられた流木を拾って利用していた。私が一見の観光客であれば美しい眺望にすぎなかった「比叡」の下で差別に苦しむ人々の姿は見えなかったであろう。どこの世界にも二重構造というものはあるものでY子の家は立派で大きく経済的に豊かであった。Y子は東京の美術関係の専門学校へ進学することになった。

3学期、生徒たちは相変わらず毎晩のように「離れ」にやって来た。Y子は何事もなかったかの如く以前の明るい少女になっていた。

私学の3学期は無いにひとしい。1月末で生徒たちは登校しなくなり家庭で卒業を待つのだ。学校に姿を見せない彼らは以前にも増して足繁く「離れ」にやって来た。ところがY子の姿がはっきり消えた。聞くと家に閉じこもったきりで外出しないということだ。病気かと案じられたがそうでもないらしい。卒業式が迫ってきた。前日は家で家族と過ごせと皆に命じた。卒業前夜、突然Y子が一人でやって来た。三和土で立ったまま一枚の色紙を差し出した。

「先生、私が一生懸命心をこめて描きました。」

「有難う。あがれ。」

「先生、高校最後の年に出会った事を私は一生忘れません。」

つぶらな瞳から溢れた珠のように美しい一雫の涙が地につく前にY子は帰って行った。色紙には極彩色で2頭の親子獅子が描かれていた。親獅子は優しい表情で後ろの子獅子を振り返って見つめていた。子獅子は険しい怒りの目で、鬣を逆巻き尾を荒々しく立てていた。子獅子の体全体が怒りに燃えていた。翌日厳かに卒業式が行われた。当時の生徒たちは殆どの者が涙を流した。式後Y子が母と挨拶に来た。目を真っ赤にした母は娘ひとりを東京に出す不安を口にした。東京は未だ新幹線も高速道路も通じていない遠い空の彼方にあったのだ。母と違ってY子は決然としていた。

「先生、私は古里を出て行きますが、決して捨てるわけではありません。東京で私は先生のように世間の常識に惑わされない強い自分を探そうと思います。いつかは必ず古里へ帰って来ます。」

強い口調に私はY子を見つめてハッとした。Y子が子獅子になっていた。色紙の中の怒りに燃えた獅子になっていた。

Y子は東京へ去った。ほくも5年後に叡山を去った。

## 1992年度第3学年全体学習・事前授業の記録(板野中学校3年B組)

主 題 「真実を求めて」

1992年10月 9日(金)

資 料 「Y子は獅子になった」(岡本顕史郎)

授業者 森 口 健 司

T 1: 資料の最後に、「すみよし」37号、徳島県立徳島商業高等学校と記されています。この作品は、現在、徳島商業に勤務されている岡本先生が、当時、昭和38年に滋賀県の高校に勤務されたときに会ったY子という女生徒の姿について、その先生自身の眼を通して描かれた作品です。徳島商業の岡本先生は、私の小学校・中学校と共に過ごし、特に中学時代は、柔道を通して将来の夢を語り合った、私にとってとても大切な友だちであるK君を鴨島商業高校時代に教えた先生でもあります。その岡本先生が、この夏休みに私が昨年度まとめた原稿を読まれて次のような手紙をくれました。

《「同和教育の実践」第13集、同和教育のよろこび～わが人生の礎として～を読ませていただきました。私は同和教育に対する先生の真剣な取り組み以上に、先生の間人としてのすばらしい生き方に感動しました。

私も23才から51才の今年3月まで連続して学級担任をしてきました。だれもがそうだと思いますが、春4月8日の始業の日には、いろんなことを考えます。クラス全員が明るく元気で仲よくし、そして信頼し支え合い、堅い団結で将来の人生を創造していく人に成長して欲しいと・・・が、前半の目標は、ほぼ達成できますが、後半に関してはほとんどだめでした。

自分の力不足を認めると同時に、クラスの本当の意味の団結なんていうことは、不可能だろうと思っていましたが、先生の文章を読ませてもらって、自分自身が間違っていたと痛感しました。改めて生徒たちを愛すること、信頼すること、そして大事にすることを教えてもらいました。

私も早くから部落問題に関心を抱き、たくさんの部落の子どもたちと関わってきました。しかし、現在の官制、お仕着せの「同和教育」には疑問を抱いています。うわべだけの口先だけの「差別はいけない」という教育。本心より激しい怒りを持たない教師から、何度、同和教育を受けても、部落差別に対して怒りをもつ生徒たちが育つわけがないと思います。

高校では、年間6時間の同和教育のロングホームが行なわれています。私も含めて、先生方の歎きは、生徒たちが意見を言わない、話し合いをしないということです。しかし、先生が書かれているように、普段から生徒たちに自由な雰囲気、しかも互いに信頼し合い、他人のことを真剣に受け止め、支え合うといった状況をつくっていかなくては、駄目だと思います。

同和教育とは、何も特別かしこまった難しいものではなくて、一日一日の自由で民主的な人間としての望ましい生き方を教えることだと思います。

最後に先生の長文を読んで感じたことですが、長文にも拘らず、文章が生き生きとしてわかり易いということです。それは言葉が生きているということと、本音で書かれているからだろうと思います。

それと読みながら、ほくの頭の中に浮かんできたことは、K君のことでした。

あまりの感動のため、思わずペンをとりました故、まとまりのない変な手紙になりました。あしからず。

同封の校誌、昨年度ですが、私の拙文がのっています。一読ください。》

T 2: 手紙の最後に「ほくの頭の中に浮かんできたことは、K君のことでした。」そのK君こそ、今も私を励まし続けくれる私の大切な友だちのK君なんです。私が教師になってK君と再会し

たとき、K君が言いました。「お前が先生になったと聞いたとき、たまらなくうれしかった。わしらのような口惜しい思いを子どもたちがせんでもいいように（同和教育）頑張れや。お前の学校にもわしらと同じ立場の子おるんやろ。その子のためにしっかりと先生してやってくれよ。」K君の言葉は忘れることはありません。そんなK君を通してつながっている岡本先生が、この手紙と共に送ってくれたのが、みんなに紹介したこの「Y子は獅子になった」という作品なんです。夏休みにこの作品を読んだ時、是非ともみんなで岡本先生の思いに触れながら、この作品に描かれたY子について語り合ってみたいと思いました。この時間は、Y子についてみんなの思うことを語り合っ、Y子の思いや願い、岡本先生の思いや願いを通して私たち自身の生き方を考えていきたいと思います。岡本先生はY子についてこう記しています。成績優秀であり、運動能力に優れていた。特に美術的能力はすばらしいものがあった。そのY子が集団面接のときに味わった思い、Y子の中にはどんな思いがこみ上げてきたのだろうか。集団面接の時のY子についてその時の思いを考えていきたいと思います。

長坂(男)他の人に負けるという気持ちはなかったと思うので、たった一言、本籍地を言っただけで、もうそこにY子の存在はないかのような態度をとった面接官に腹を立てたと思います。

山内(男)やっぱり本籍地だけしか聞かなかった面接官に腹をたてたと思います。

T 3: みんながY子の立場であればということで考えていきましょう。

姫田(女)もし、私がY子の立場であれば、まず最初に怒りがこみ上げてきたと思います。だからY子も口惜しさでいっぱいだったと思います。

奥尾(男)最初は現住所以外に何を聞かれるかと、面接官の話をよく聞いていたと思います。けど他の人ばかり質問されて、自分は学校名と氏名と住所だけしか言ってないので、段々口惜しくなってきたと思います。

藤井(女)なんでこんな屈辱的な思いをしなければならぬのか、早くこの場所を逃げ出したいという思いになったと思います。

池田(男)面接でY子が話したのは、住所だけだったということだったけど、僕はそんなことが平気でできていたのかと思うとびっくりしました。そしてその後本当にY子を不合格にしてしまうなんて本当におかしいと思いました。Y子は本当に口惜しかっただろうし、腹が立ったと思います。

村田(男)住所を聞かれて部落だとわかったとたんに何も質問してくれなかったのも、その面接官に対する怒りというものがあったと思います。それと、もしかしたら自分が部落に生まれたことに対して、いやというか、部落に生まれたことをつらいと思ったと思います。

T 4: 最初は面接に対する怒りがこみ上げてきたらと思うけど、その次にはやっぱり自分が部落に生まれたということ、そのことがすごくみじめになってきたのではないだろうか。今の村田君の発言についてどうですか。

大西(男)部落出身ということで、そんないやなことばかりあるのと思うかと思ったと思います。僕はY子さんに対してそんな態度をとった人にすごく腹が立ってきます。なんで一生懸命に頑張っているY子さんのけものにされないかのかと僕は思いました。

T 5: さっきの村田君の発言について岡田さんどうですか。

岡田(女)前は部落の人が差別されてあたりまえという考え方が世の中にまかり通っていたと思うんです。だから、Y子さんはもしかしたら部落に生まれたことをくやんでいたかもしれないと思います。

T 6: Y子さんの心の中は怒りだけではなく、腹立たしさだけではなくということやな。自分たちは差別されてもしかたがないという気持ちもあったということかな。

長坂(男)Y子さんはこれが部落差別なのかと、悲しさでいっぱいになったと思います。そして、部落に生まれたのはしかたのないことなのかという絶望感とあきらめの気持ちがあったと思います。

T 7: ここで最も問題になることは、差別されたことに対する怒りだけがY子さんの中にあっただけではなかったということだと思えます。Y子さんの中にあっただけの怒りや憤りだけだったら、それは差別をなくしていく行動になっていくわけです。でも差別をなくしていく行動にならないというのは、怒りだけではない。それ以外の感情に流されてしまい、自分を惨めにしていく。そのことをしっかりとつかんでおきたいと思えます。

大久保(女)差別がいかに間違っているとわかっているけど、いざ自分が差別を受けたらなかなか立ち上がれるものではないと思います。やっぱりこのときのY子さんの心の中は怒りもあっただろうけど、どうしてという悲しみの方がずっと大きかったと思います。

T 8: どうして差別されるのかという悲しみ、口惜しい許せないという怒り、さまざまな思いの中でY子さんは揺れていただろう。悲しみをそのまま自分の中にためてじっと耐えているだけだったら、その悲しみはやがてしかたがないというあきらめが変わっていくように思う。人間として大切なものは、決してあきらめることのない憤りだと思えます。

奥尾(男)でもこの時は、部落に生まれると差別されるのがあたりまえのように思っていたので、口惜しい気持ちがこみ上げてきながらも、しかたのないことだとあきらめるところもあったと思います。

村田(男)やっぱり部落問題学習がちゃんとなされていたら、この面接官のとった行動についてなんで部落の人間だけこんな仕打ちを受けなければならないのかという怒りを感じることができたかもしれないけど、部落に生まれた人の中には、差別を絶対おかしいものと感じるより、部落に生まれたからしかたがないのかなあというあきらめの気持ちがあったと思います。

近藤(男)なんで被差別部落に生まれたというだけでなぜ差別されるんだというようなのはがいたらしい思いはこみ上げていたと思います。

平岡(男)面接官に対するくやしさはあったと思うけど、部落に生まれたために差別されるということとはしかたのないことなのかというあきらめの気持ちもあったと思います。

T 9: 口惜しさはあっただろうけど、心の底からこみ上げてくるような怒りにはなっていない。その中で部落に生まれたというのは自分の運命なんだ、しかたのないことなんだというあきらめの気持ちもあったというような意見があったけど、そのことがとても問題だと思えます。口惜しさや恥ずかしさでいっぱいになりながらも、その原因が自分たちの中にあるように思ってしまう。その間違いに気づかない。差別は絶対おかしいこと、間違っていることをしっかりと受け止めることのできないY子であったこと。冷静に考えたら差別はいかんということとはだれでもわかっています。でも差別が現実にある中で、差別されるということ、部落に生まれたということが惨めでしかない。部落に生まれたということは恥ずかしいことでしかない。そんな認識しか生まれてこない。そんなY子にさせられている。差別と闘い、差別に立ち上がっていく行動が起こせないY子であるということが悲しいことだと思えます。でもそんなY子がA先生にこのやるせない口惜しさを伝えに行きます。だれにもぶつけることができなかった口惜しさ、悲しさ、惨めさ、そんな思いをわかってほしいという思いでA先生のところに行きま

したよね。そこでY子は何かをつかみますね。そのときのA先生の言葉です。その言葉の意味を考えてみたいと思います。先生はこう話されています。「世間という実体のないものを隠れ蓑にして個人の意思で差別している」この言葉をみんなはどうとらえますか。

三原(男)差別するのは自分自身であるのに、そのことを周りの人や周りの社会のせいにして自分は差別などしていないと、自分の醜さをごまかしているということを言っているんだと思います。

亀井(女)私も世間というのはただの言い逃れだと思います。自分が差別しているのを世間が悪いんだ、世間のせいなんだと言って、罪をなすりつけているように思います。本当は世間なんか関係なしに、その人がそうしたいだけなんだと思います。

中岡(男)自分の意思で差別をしているにもかかわらず、世間が言っていると言って、世間のせいにしてるんだと思いました。

大久保(女)世間が差別しているというんじゃなくて、差別解消とか言っているけど、一人一人が差別しているんだと思います。一人が変わっていかんと世間は変わらんし、世間とは一人一人の集まりであって、自分もその世間の一人であることをほとんどの人が忘れてるんだと思います。

T10：結局、世間というのは全体を指しているけど、まずその人間の問題ということかな。自分の意思ではないというように言いながら、それはまさしく自分の意思そのものであり一人一人の問題だということかな。

田辺(女)自分以下を求める醜い自分が多くの人を傷つけていることに気付かず、そのことをごまかすために、世間が差別しているという言葉を使っているんだと思います。

土内(女)世間というものを通して自分の差別意識をごまかしている人たちは、自分が部落に生まれなくてよかったと思っているように思います。差別は間違っただことなんだと思っている人もいるかもしれないけど、その人たちも世間が怖くて言えないと思うんです。だから世間に負けている人がより差別していると思います。

T11：個人の気持ちの中には差別はいかんという気持ちがある。でも世間全体が差別していると思込んでいるから、自分も差別して当然だと思込んでいるということかな。

岡田(女)差別していないと言いながら、実際いろんなところで差別している人は、それが差別だと気づいてないんだと思います。世間はあだから、世間はこうだからと言って、結局自分自身が差別していることに気づいてない人が、世間をつくっているんだと思います。

T12：自分がしていることそれが差別だと気づいてないから、世間というものに責任転嫁をし、醜い自分や世間をつくっているということかな。

長坂(男)部落の人を差別して当然という考えを持っている人は、自分自身を差別している人たちなんだと思います。

山内(男)僕もみんなと同じように、差別して当然だという人が世間のせいにして、自分が差別していることに気づいてないんだと思います。

田村(男)一人一人が差別しているのに、それを世間のせいにして差別はいけないと言っていると思います。

池田(男)自分が差別しているのではなくて世間が差別している、自分は悪くない、そういった考えで自分のずるさを表に出さず、逃げているだけだと思います。それにやっぱり自分は部落でない、自分には関係ないといった考えからも、こういうことが起こってくるんだと思います。

本当にこの表現はびったりだと思えます。世間というものに隠れているだけで、自分がその世間の中の一人だということに気づいていないんだと思えます。

T13：今の池田君の発言を受けてどうですか。

村田(男)その頃は部落の人は差別されてあたりまえという状態に近かったように思います。それで部落の人と結婚したいといっても、世間では部落の人と結婚するのは常識ではないからやめなさいというように言っているけど、それも池田君が言った通り世間を隠れ蓑にして、実は自分自身が部落の人を自分たちと違うと思いついて差別しているんだと思えます。自分自身が差別の塊であることをごまかして、周りが差別しているから自分も差別して当然と考える姿が、自分自身の姿であることに気づいていないんだと思えます。結局一言で言うたら、みんながしているから自分もして当然ということかな。だから自分一人だけが差別に反対したってみんながしよるからしかたがないと考えていく。結婚の問題にしてもみんなが反対しているのに幸せになれるのかという感じで反対していく。ほとんどの人が差別しているんだからしかたがない、それは当然のことなんだと思っている。そうではなくて、自分の意思の中に差別意識があるということに気づいていないわけでしょう。部落差別はみんなの中にあるんでしょう。そういう差別する自分は自分自身の中にあるわけでしょう。そのことを洗っていくことが人間としていくわけでしょう。必要なわけでしょう。自分自身の中にそういう差別意識があるということに気づかないわけでしょう。でもY子はそんな悲しみや口惜しさの中で、岡本先生にその思いを語るにより、新しい自分を見つけ出していきます。そして岡本先生の励ましの中で高校を卒業する前日、親子の獅子の絵を描いてくる。一時は部落差別に押しつぶされそうになったY子が岡本先生と出会い、岡本先生の励ましや支えの中で、卒業に際してY子が絵を描いた。そのY子が親子獅子の絵に込めた願いというものをみんなで考えたいんです。この絵の中にみんなが見るもの、みんなが感じ取るものを語ってほしいと思えます。

井端(女)自分が差別に負けない強い獅子になるようにという願いを込めて描いたんだと思えます。ふるさと離れて東京にいったとしても強い獅子のように生きていくことを願って描いたんだと思えます。

手塚(女)Y子はこれから部落に対する差別と力いっぱい闘うつもりだったのではないかと思えます。Y子は部落に対する間違った認識に対する怒りをこの絵にぶつけていったと思えます。

佐野(女)面接の時の口惜しさをバネとしてこれからの人生をこの絵の獅子のように生きていこうと描いたんだと思えます。

稲井(女)差別を受けてきた部落の人々の怒りを獅子の表情に表わすべく、部落差別に対する自分の思いのすべてをぶつけた絵を描いたんだと思えます。

志宇知(女)獅子は今のY子自身を描いていると思えます。とても怒っていて差別解消に燃えているような気がします。親獅子はY子の先生みたいにY子をずっと見守っていて一緒に闘ってくれるような人を描いていると思えます。

亀井(女)この絵全体に怒りが込められていると思えます。願いというより自分自身の意思を表現したように思えます。「これからは絶対に負けない、差別に立ち向かって、差別と闘っていく」というこれからの自分の生き方を表現したものだと思います。

岡田(女)獅子からうかがえる怒りは、Y子さんのその時の気持ちを表わしていると思えます。部落の人々を差別する世間をつくっている人たちに怒っているんだと思えます。

村上(男)企業や世間から受けた屈辱的な差別に始めは負けていたけど、そんな自分から大きく成

長していったY子さんの絵に込めた願いや怒りを感じます。この絵からは絶対差別を許さないというY子さんの心の叫びのようなものを感じます。

板東(男)獅子のこのように強い意思と激しい怒りを持って、差別に対して猛然と立ち向かっていくんだという思いが、この絵には込められていると思います。

中岡(男)差別のない世の中になっていくようにという願いがこの絵には込められていると思います。それと差別を受けた怒りがこの絵に表われていると思います。

奥尾(男)これからどんな差別を受けようとくじけず頑張り抜くという気持ちが、この獅子の絵に表われていると思います。

石川(男)これからずっと部落問題と闘っていくぞという思いが、この絵には込められていると思います。

扶川(女)差別に絶対に負けるものかという思いを絵に表わしたんだと思います。

T14: 絶対に差別には負けないという決意、人間として堂々と生き抜く決意がこの絵の表情に表われているということですか。

姫田(女)この子獅子はY子の現在の姿で今も続いている差別に対して怒りをかみしめている姿だと思います。そして、その親獅子はあらゆる差別がなくなったとき、みんなが微笑んで生きていくことができる。そんな社会が実現した時の獅子の姿が親獅子の姿だと思います。そしてこの親獅子の姿は、Y子の願いでもあると思います。

数嗣(女)Y子は子獅子、Y子の母は親獅子、母はたまらない気持ちでY子を見つめているが、Y子はだれが何と言おうと差別に負けない、岡本先生のようにたくましい人間になろうと努力し頑張っていこうとする決意を絵にしたんだと思います。

大久保(女)怒っている子獅子の絵は、今のこのすごい怒りを覚ましてはいけないという思いを絵に表現したものだと思います。差し障りのない生活の中ではわからなかったものをつかみ、その中で人間としてより確かな生き方をつかんでいこうとする決意を示したものが、この絵だと思います。

田辺(女)自分のような惨めな思いをしていく仲間が決して出てこないように、自分が差別をなくしていく一人の人間であり続けるんだという願いを込めて描かれたのがこの絵だと思います。そして、これからの人生を強い獅子であり続けたいという思いが込められていると思います。

T15: 強い獅子であり続けるといふ思い、みんなはどう感じますか。

池田(男)やっぱり僕はあの絵は、Y子の心の中にある差別を許さないという怒りを表現したものだと思います。あの屈辱的な面接試験や、そんなことがあたりまえになっている社会そのものに対する自分の心の中にあつた怒りをすべてあの絵にぶつけたんだと思います。

村田(男)親獅子というのは子獅子がやっぱり部落から出ていっても、差別に会いほしないうるかかと心を痛める部落の親の姿であり、子獅子はその思いを受けて世間の目に負けずに差別に対する怒りを持って、生きていきたいという願いを持った姿だと思います。

T16: 子獅子がY子の意思である。それでは親獅子は何を訴えているんだろうか。村田君の発言につなげてください。

山内(男)親獅子は差別がなくなった時のY子の姿だと思います。

長坂(男)差別がなくなった時にみんなを見つめているやさしい顔を表現しているんだと思います。

大久保(女)冷たい世間に子獅子が決して負けてしまわないように、親獅子が子獅子をしっかりと見つめているんだと思います。

T17: 子獅子に込められた願い、親獅子に秘められた思い、その思いを大切にしていきたいと思うんです。そして、Y子は次のように言い切っています。「私は古里を出ていきますが、古里を捨てるわけではありません。いつか必ず古里に帰ってきます。」こう言い切るY子も心の中にはどんな思いが込められていたと思いますか。「私は古里を出ていきますが、古里を捨てるわけではありません。いつか必ず古里に帰ってきます。」というY子の思いについてみんなで語り合いたいと思います。

大西(男)古里を離れ、東京で暮らすことになっても、差別に憤った気持ちをバネとして、これからも一生懸命に部落問題に取り組み、差別をなくして、そしていつか必ずなくなった時に古里に帰ってこようと思ったと思います。この口惜しい気持ちのままではいたくないという思いがあったんだと思います。

T18: ほとんどの人が逃避すると思うんです。逃げることができるなら考えずにいたい、こんなつらいことを気にかけずに生きていけたらと思うんです。そして、自分だけでも部落差別から解放されたいと願うんです。私にはそんな思いの中で揺れ続けた大学時代があります。ある意味で東京という大都会の中で、自らの出身を隠し、部落を語らずに生きていくことは可能かもわかりません。実際これだけ差別の渦巻く社会の中で、その生き方を選ぶ人は少ないと思うんです。でもY子はそうではないんですね。大西君の思いにつなげてください。

平岡(男)差別から逃げて生きるのが人間として生きることではない。どんな厳しい状況の中にあっても、自分を育ててくれた古里を裏切りたくない。自分の歩むべき道を見失うことのない生き方をしていきたいという決意が、Y子の「私は古里を出ていきますが、古里を捨てるわけではありません。いつか必ず古里に帰ってきます。」という言葉になったんだと思います。

近藤(男)自分のような腹立たしい思いの中でつぶされていくような人たちが、もうこれ以上古里から出てこないようにするためにも、東京というところで自分というものを、差別をなくすという、差別と闘うということをしかりと学んで、もっともっと強い人間になり、古里に帰ってくるんだという思いがあったんだと思います。

田村(男)Y子は差別から逃げるのが人間の生き方ではなく、許すことのできない差別をなくすのが、人間の生き方であるということをしかりとつかむことができていたんだと思います。

山内(男)東京に行って一人になって自分というものをしかりと見つめ、差別に打ち勝つ強い自分をつくり上げ、古里にもどってこようと思ったんだと思います。

T19: より強い自分をつくって帰ってきたいという思い。山内君につなげてください。

長坂(男)僕も、Y子さんの心の中には、東京という今までと違うところで世間の考えに惑わされないような強い人間になるという決意があったと思います。

扶川(女)古里を出ても、古里の仲間の思いを大切に生きていき、必ず差別をなくしていく生き方ができるようになって古里に帰ってくるんだという気持ちでいっぱいだったと思います。

姫田(女)Y子は岡本先生に出会って、これからもずっと差別がなくなるまで闘っていきたくて、差別に負けて逃げるみたいな感じなので、差別と闘い続けて生きていくという自分の思いを先生にわかってもらいたかったから、そういったんだと思います。そして何より東京に出ていっても古里の仲間たちの思いを共に担ぎながら、差別解消に向けて闘い続けたいという思いがあったと思います。

数嗣(女)古里というのは自分を生み出してくれた大切なものだと思います。Y子は今よりも強くなって仲間を増やし、先生のようにたくましくなって必ず戻ってくるという気持ちで、その言

葉を言ったんだと思います。

大久保(女)いつか古里に帰ってきますと言ったのは、先生に絶対差別から逃げていくのではないということをおきかかったんだと思います。そして、部落差別をなくして胸を張って古里に帰ってくるという意味があると思いました。面接試験のときに味わった口惜しさ、それにより不採用という屈辱的な扱い、そんなおかしなことが許される世の中があるということを決して許してはならない、そんな思いが「私は古里を出ていきますが、古里を捨てるわけではありません。いつか必ず古里に帰ってきます。」という言葉になったんだと思います。

田辺(女)自分のことを全く知らない所に出ていっても、出身を隠してビクビクしながら生きるのではなく、世間が被差別部落をどのように見ているか、思っているかを自分の目で見てきて、それは違おうと自分の口でたくさんの人に訴えようと思ったと思います。そんな思いから出た言葉だと思います。

土内(女)Y子には自分が味わった思いを自分の後輩たちに味わってもらいたくないという思いがあったと思います。

村上(男)僕ももう自分のような気持ちを味わう人が出ないことを願って、これからの人生を差別解消のために何か力を尽くす生き方がしたいという思いがあったと思います。

板東(男)古里を出ていくということは、古里を掛け替えのないものとして生きていくんだという決意があったんだと思います。

中岡(男)差別から逃げずにこれからも差別解消に向けて生きていくという願いが、この言葉に込められていると思います。

奥尾(男)僕もこの言葉には差別に立ち向かっていくという思いが表われていると思います。古里を出ていくけど、決して逃げるわけではない。自分の出身地は被差別部落であるけど、決してそのことを恥じることはないんだという誇りがこの言葉に表われていると思います。

T20：残り時間があと僅かになってきましたけど、みんなの思いをまとめて語ってほしいと思います。

村田(男)古里である被差別部落を出て行って、部落外のところで自分が部落の人間であるということをおぼえながら生きていくのではなくて、自分は自分の古里である部落をみんなに知られても、他の人たちと同じように一人一人が、人間として大切にされて生きていくことのできる社会をつくりたいという思いと、自分自身も強い人間になってくるんだという思いを込めていった言葉が「私は古里を出ていきますが、古里を捨てるわけではありません。いつか必ず古里に帰ってきます。」だと思います。それでももしかしたらY子も部落の人間だから、部落を捨てて逃げていきたいという思いが出てくるかもしれないという不安があったと思うんです。それをやっぱり岡本先生に「私は古里を出ていきますが、古里を捨てるわけではありません。いつか必ず古里に帰ってきます。」という言葉として語ることを通して、自分自身が差別に負けない、差別を許さない生き方をより確かなものにしていこうとしているように思いました。

T21：最後の言葉です。「いつか必ず古里に帰ってきます。」この言葉に秘められた願い。この作品と共に、この言葉の奥に流れるものをお互い大切にこれからの学習を積み上げていきたいと思います。今日はこれで終わります。

※ 本冊子の表紙にY子さんが描いた獅子の絵をつかわせていただいた。